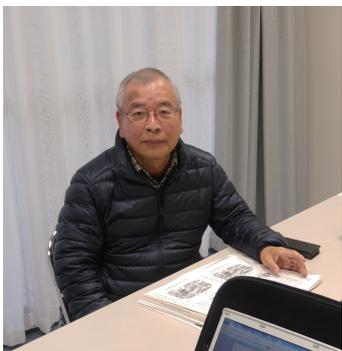


## 私たちの知らない『野寄』 - 私と地域とのかかわり 本山西ふれあいのまちづくり協議会委員長，野寄財産区管理会会長 木下昭満さん（七〇歳代）

著者	木下 昭満，野上 黎吏，甲南大学久保ゼミ，久保はるか
雑誌名	「大学周辺地域の歴史を知る」シリーズ
巻	1
ページ	11-17
発行年	2017-05
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002911">http://doi.org/10.14990/00002911</a>



木下さん 12月2日撮影



絶好の遊び場だったヘルマン屋敷（当時）



ヘルマンハイツからの展望

たら石が水を吸い取ってくれると思っていたので、実際に効果があるかどうかは分からないのですが、水が耳に入ったら必ず石を耳に当てたことが思い出として残っています。

ローラースケートもしていました。当然手作りの上に乗って、ゴロゴロと滑っていました。アスファルトの道が近所になかったのですが、川を渡って住吉の方に行くときれいに舗装された道路があったので、そこへ遠征して遊んでいました。ゴーツと大きな音がするので、楽しかったです。住吉地域は住宅地が多く、豪邸がたくさんありました。野寄の辺りは土・石ころだらけの道でした。高学年になると、近くの十文字山へ行きました。また、今、ヘルマンハイツと呼ばれている丘の上に、戦前、ドイツ人のヴィクトル・ヘルマンが住んでいた屋敷がありました。それが戦争で焼けたのか不審火で焼けたのか定かではないのですが、当時は焼け跡になっており、そこでよく遊んでいました。また少し年齢が上がってくると、私は絵が好きだったので、山へ登ってスケッチをしていました。その廃墟となったヘルマン屋敷の絵を描いたりもしました。

中学生に上がってからは、空気銃で鳥を撃ちに山に行きました。玉をいれなくても音がパーンと鳴り空気だけが出る仕組みとなっているので、人

## 私と地域とのかかわり

本山西ふれあいのまちづくり協議会 委員長  
野寄財産区管理会 会長  
木下昭満さん（七〇歳代）

—幼少期の思い出について  
教えてください。

私が生まれたのはこの神社（大日女尊神社）の近くです。遊ぶといいますが、小さい時はあまり遠方には行きませんので、この近所で遊んだり、また神社に広場がありましたので、そこで野球をしたりしていました。この建物（注：地域福祉センター）は当時ありませんでした。また、神社の社殿は昭和三八（一九六三）年に再建されたので（注：社殿は、昭和二三（一九三八）年の大洪水と戦災によって、甚大な被害を受けた）、その間、畑や隣接のブロック会社の資材置き場になっていました。ブランコもありました。子供同士で草野球をやっていました。あるいは路地で石けりや、缶蹴りもしていました。

べったん（キャラクターカード）はご存知でしょうか？今でいうメンコのことです。カード

を地面にバーンとたたきつけて、相手のカードをひっくり返したらそれをもらうことができます。自分のべったんにロウを塗って分厚くして、絶対動かないようにみんなが競って作っていました。さらに、地面に三角形を描いてビー玉を並べ、二メートルくらい後ろから狙いを定めてパンとはじいて、当たったビー玉が外に出たらもらえるというような遊びもしていました。また探偵ごっこもしていました。この近所を走り回ったり、かくれんぼのようなことを、小学生のころからやりました。

夏になれば毎日、住吉川に泳ぎに行きました。堰堤は実際にはあまり高くありませんが、そこから飛び降りるのが怖くて、小さい頃はすごく高いという感じがありました。堰堤の下に水が溜まっているので、水位は今より深かったです。今あるような遊歩道ができる前だったので、川原に石がゴロゴロしていて、歩く足の裏が暑かったです。また耳に水が入った時、熱い石を耳にあてて、そうし

に向けると危ないため、学校では禁止されていましたが(笑)。スズメは当てるだけです。それも滅多に当たりませんでした。

### ―地域活動はいつ頃から始めましたか

地域活動を始めたのは昭和五四(一九七九)年くらいです。約三〇年前に消滅した青年会を同じような年代の者たちで再編しました。神社の行事などは年配者が行っていました。そこに我々も参加して教えてもらい行事を通じてコミュニケーションが図られました。この頃より地域の中で色々な役に付かされました。

現在、野寄財産区会会長、本山西地域福祉センターでの本山西ふれあいのまちづくり協議会委員長、野寄区地車保存会会長等々を任されるようになりました。

### ―だんじりについて教えてください

野寄の地車(だんじり)について、今分かっているのは、今の地車が五代目ということ。江戸時代には、一七三〇年代から本住吉神社に宮入りしていたと思われませんが、どのようなものであったかはよく分かりません。

大正時代末、地元の名士であった久原房之助

一本の原木で、東明と野寄の二つのだんじりを造ったそうです。大工は地元、神戸住吉に住む名工、大石巳代吉で、神社の境内で造られました。

昭和八年一月に完成し、大日女尊(おおひるめのみこと)神社境内で盛大にお披露目が行われました。当時の祭りといえば村中あげての祭り、本住吉神社へ宮入りしたら地車を境内に一晚留置きして、翌日伊勢音頭を唄いながら迎えに行ったそうです。

ところが、昭和一三年七月、阪神大水害が野寄地区を襲いました。住吉川が氾濫し、おびただしい量の土砂が流れ込み、大日女尊神社の境内は土砂で埋まり、社務所も大きな被害を受けました。新調間もない地車も埋もれてしまいました。後日もとの場所にみんなの力で戻しました。復興までにはかなりの年月がかかり、祭りができるようになった頃には、既に風雲急を告げ、逆に祭りどころではなくなっていました。

終戦も間近い昭和二〇年八月五日(日)、B29の大編隊が阪神間の都市を襲いました。神社付近も大きな被害を受け、神社から神社の北東にかけて多くの家が焼けてしまいました。そして不運にも神社に落ちた一発の焼夷弾が地車小屋に命中し、新調間もない地車も灰燼に帰ってしまったのです。

氏が村のために新しい地車を購入し、初代の地車を引き取ったと聞いていますが定かではありません。この地車を見に行ったことのある人に聞くと「真つ黒けの汚いだんじりで、前の柱には金網がはってあり、セキセイインコが飼われていた」と言っていました。新しいだんじりは、河内の方から馬に曳かせて持って帰ってきたそうです。端正なだんじりだったと聞いています。

昭和三年本山西部区画整理組合が設立され、道路の整備が行われたため、道路幅が以前に比べ随分と広くなり、今まで小さなだんじりしか曳くことができなかったのが、道幅が広がったおかげで大きなだんじりも曳くことができるようになりました。この頃からだんじりのブームが起りつつあり、各地区が競ってだんじりを新調・購入していききました。そうした中この野寄でも、どこにも負けない大きなだんじりを新調しようということになりました。

そこで当時曳いていただんじりを中野地区に譲渡し、村所有の土地を売って、そのお金をもとに大きなだんじりを新調しました。彫師は富山県井波出身の川原啓秀によるものです。当時啓秀が灘区の脇の浜に工場を持ち、のりにのっていた時期の製作で、代表作もこの時期に集中しています。新しいだんじりは総黒檀(こくたん)のだんじりで、東明地区のだんじりと兄弟だんじりでした。

その後しばらくは森地区や弓場地区、芦屋の打出地区のだんじりを借りて曳いていましたが、昭和三〇年に打出の地車を借りたのが最後となり、その後は地車が曳かれなくなりました。

地車が、曳かれなくなると二九年後の昭和五九年に「地車のある無しに関係なく、本山の人たちは仲良くやっつていこう」ということで、各地区の青年会を中心に本山連合青年会が設立されました。だんじり祭りがある時は、野寄の青年会は雑踏警備に立ち、協力しましたが、自分たちの地区だけに地車がなく、地車を曳けないということには一抹の寂しさがありました。

それで、どうしても地車を曳きたいという若者たちは、田中地区へ行っていました。

「野寄にも地車が欲しい」

そう考えた私たちは、昭和六〇年五月のある日、自分たちで地車を造ろうという事になりました。幸いメンバーの中には大工さんや鉄工所経営者など腕に覚えのある人がいて、全くの素人集団ではなかったのです。

まず他地区の地車を参考にしながら、どんな地車を造っていくかを話し合いました。そして、材料を買い、設計図を描き、木を切っていくまじりとわけ難しかったのが破風(はふ)で、曲線に切っていくことがなかなかできません。欄間(らんま)にしてもちよっとくり抜く程度ならできる

のですが、それ以上となるとなかなか大変でした。昔の地車のイメージで作っていました。当時は昔の地車の写真がなかなか出てこず、厳しい状況の中で製作でした。また、地車の勉強にと、日曜日ごとに車をつらね、大勢で大阪や淡路島に出かけ、入れ替り立ち替り見学してきました。

こうした地道な作業が一年近くも続く中、村の長老たちは「結局できたとしても、他の地区の本式の地車とは比べ物にならないだろう。みんなの熱意は痛いほどよく分かった。地区として地車を購入しよう」ということで意見が一致し、みんなに地車を探して来るよう言われました。地車製作のために結成された「野寄区地車準備会」を中心に寄付金を募るなど、新しいだんじりの購入に備えていきました。地域住民からの寄付金と野寄財産区管理会からの支援金に加え、購入資金としました。

昭和六一年、大阪の太鼓正よりだんじりを購入しました。この年の一月一日に地域住民や関係者が集い、盛大にだんじりのお披露目を行いました。

そして翌年昭和六二年、町曳き、宮入りがついに復活しました。今年も地車祭りが復興して三〇周年になります。またこの年より、野寄の地車復活が契機となって行われるようになった

の地車小屋は、もともと地車製作の作業場の要素が強かったのですが、新しい地車小屋は、地車の収納を第一とし、広さにゆとりを持って作られました。

平成一一年には、大鼓（口径二尺五寸）を新調しました。昔から野寄地区の鳴り物は、「太鼓の音神の好む音」と言われ、大太鼓でゆったりとしたテンポが大きな特徴です。

野寄の地車は、地域の伝統文化財であり、団結の象徴でもあります。これからその伝統文化を、若い人達に引き継いで行って欲しいと願うばかりです。

### ―地車保存会の会長になったきっかけは何ですか？

会長になったのは、平成一六年から現在に至っています。日頃地車に関して熱心だったからだと思います。地車祭は、早くから準備をしなくてはならないので、巡回コースの作成など一手に引き受けていたことも一因ではないでしょうか。

「本山八地区山手幹線だんじりパレード」にも参加するようになりました。

その後大改修を三度行いました。まず昭和六三年に屋根を改修し、擬宝珠（ぎぼし）・勾欄（こうらん）を刳（はね）・勾欄に替えました。平成二年には、啓秀の孫である川原和夫師に鬼板を発注しました。高井宗官さん所有の樟（くすのき）が切られるというのでお願いに上がり、この樟から、鬼板三枚を彫り、翌平成三年に付け替えました。

二度目の改修は平成五年に行い、彫刻と鏝（かざり）・金具だけを残して解体。全体を一回り大きくしました。さらに土呂台（どろだい）・虹梁（こうりょう）・木鼻（きばな）の彫刻を川原一門に発注し付け替えるとともに、同じく川原和夫一門に新たに拝懸魚（おがみげぎよ）・降懸魚（くだりげぎよ）を依頼し、平成七年と八年に付け替えました。

三度目の改修は、平成一六年から二年間かけて全て解体し、土呂台から上部を新しくしました。屋根や柱を改修し、彫刻は、他地区の地車には見られない野寄地域ゆかりの古跡及び近隣の風景を取り入れた彫刻に入れ替えました。野寄の地車の自慢の一つに昼提灯があります。これは、神話、武將、童話を中心に八個つけられており、人々の目を楽しませてくれます。

平成九年には新しく地車小屋を作りました。旧

### ―木下さんから見た野寄のいいところは？

私は、十文字山からの眺めが大変好きです。野寄地域が一望できます。遠く大阪湾から和歌山辺りまで見渡され小さい頃は見渡せば田畑ばかり、魚崎浜も手じかに見え何も遮られるものも無く、のどかな光景でした。

現在は、住宅街として洒落たマンションやお洒落な住宅が多く増え住み良い街に替り関西に誇る住宅街に変貌しつつあります。野寄地区は何かにつけて各種団体の横の繋がりが良く、自主的に街中をボランティアで掃除や防犯パトロール等を地道にやってくれています。頭の下がる思いです。また、本山第二小学校に野寄地区（西岡本）から通う児童が一〇〇%在籍しており、だんじり祭り等の行事に沢山参加してくれています。挨拶ができる子ども達が多いのが嬉しいですね。

### ―これからの野寄について

この地域には、自治会がありません。各町に自治会を作る話があり、まず四丁目の自治会ができましたが、二年余りで自然的に解散してしまい、その他の区域もできませんでした。地域には、財産区、ふれあいのまちづくり協議会、老人会、婦



12月2日撮影  
上段中央が木下さん ほかせミ生

人会、青年会等の各種団体があり、横のつながりがしっかりしているため、自治会の必要性が無かったのです。  
これからも各種団体の協力の元で明るく住み良い街を目指して行きたいと思っています。  
現在、この地域の歴史を皆さんに知って頂こうと財産区管理会で、仮称「野寄村誌」を執筆中です。完成すれば皆様にお知らせしますので是非ご期待ください。

取材日 二〇一六年 一月一〇日

二月一日

編集 野上黎史



だんじり祭りに参加する若中、小若、世話人、賄いの皆さん